

学級担任による英語絵本読み聞かせの実践

— 推測力育成を目指した ALT との連携 —

教育学研究科 教育実践創成専攻 教科領域実践開発コース 初等教科教育分野 丸山 真知子

1. 研究の背景

「グローバル化する社会の中で、言語や文化が異なる人々と主体的に協働していくことができるよう、外国語で躊躇せず意見を述べ他者と交流していくために必要な力」をつけるため、小学校中学年から外国語活動を開始し、高学年で教科化することが検討された（文部科学省, 2014）。中学年から外国語活動開始を見据えて、文部科学省（2016）は小学校の新たな外国語教育における補助教材「Hi, friends! Story Books」として絵本教材を開発し、研究開発学校等においてその効果の検証がされた。絵本の読み聞かせを通して、児童は多くの英語を聞く機会を持ち、絵本の絵から様々な情報を読み取って内容の理解へと進んでいくことができる。また、ジェスチャーや声色などの工夫をすることで、児童の発話も引き出すことができる。さらに、バラエティーにとんだ文脈の中で、意味のある英語表現に触れることができる。

以上の効果を踏まえると、日本語による読み聞かせに精通している小学校教員が、英語絵本を小学校での英語教材として取り入れることは、価値が高いと考えられる。多くの児童は幼少のころから絵本を読み聞かせてもらった経験がある。しかし、英語教材として絵本を活用することは、外国語の指導経験が浅く英語に苦手意識のある小学校教員にとっては方法がわからず、発音など技術面のハードルが高いという現場の課題がある。

1-1. 昨年度の研究より

これらの課題意識をもとに、昨年度「小学校外国語科授業に絵本を取り入れる効果— 帯活動としての担任教師による読み聞かせ —」というテーマで研究を行った。長田（2018）は、第二言語習得において重要とされる文脈の中でインプットの量を確保する手段の一つとして、「読む」素材である絵本教材の活用の可能性について述べている。しかし、英語絵本の先行研究では中学年の実践や英語専科教員の研究が多い点から、「教科化された高学年において担任が授業を行う」という新たな視点での絵本活用の可能性を考えた。絵本は低学年の児童が好むものと思われがちだが、高学年の児童の反応も肯定的であった。また、担任が無理なく継続的に取り組める読み聞かせの方法は、小学校外国語科においても有用な教材となることから研究結果からわかった。

コミュニケーションは相手の話を「聞く」ことから始まる。聞いて話がわかる体験を児童にたくさんさせ、児童自らが「話す」ようになることが大切である。その工夫の一つとして絵本の読み聞かせがあると「Hi, friends! 2 指導編」（文部科学省, 2016）では書かれている。また、児童に良質なインプットを与えるために絵本は効果的な教材であり、授業で積極的に扱うとよいと示されている。しかし、英語絵本はまだ教材としての地位は低く、読み聞かせとして取り扱われる頻度も少ない（松浦, 2012）ため、学習指導要領の目的に合わせた絵本の読み聞かせ研究が今後必要（金山, 2021）と英語絵本読み聞かせの展望が述べられている。

1-2. なぜ担任が読み聞かせをするのか

杉本ほか（2010）は、学級担任は児童の普段の様子や集団の特性を把握しているため、絵本の内容や難易度を適切に選ぶことができ、児童の実態に合わせた読み方の工夫や問い方ができると述べている。しかし、英語指導に不安を感じる担任も多く、ALT との連携が重要であるため、ALT からの問いかけや

児童への働きかけが、担任の指導力を補完する役割を果たすとも述べている。

専科教員の配置も一定数あるが、小学校における外国語の授業担当者は、ほとんどの場合学級担任がALTとともに授業を行っている。令和5年度の小学校における実施状況調査（文部科学省, 2023）によると、英語教育担当教員延べ163,475人のうち学級担任は88,439人であり、学年間の交換授業を合わせると104,956人の担任教員が外国語の授業を行っていることが示された。一方、小学校教員の英語免許所有者はごくわずかであり、英語能力に関する外部試験CEFR B2相当以上（英検準1級以上など）を取得している教員についても極めて少数である。また、小学校教員養成課程において英語指導に関する科目の習得が義務づけられたのは2019年度以降であり、小学校教員の多くは外国語を教えたこともなければ大学の教育課程で指導法を学んでもいない。総合学習の一環だった時期や外国語活動導入期だけでなく、教科としてスタートした現在も学級担任主導の授業は継続している。こうした位置づけが、担任の英語指導力に関わる問題や教員負担の問題にも直結した（寺沢, 2020）との指摘もある。学級担任とALTがお互いの良さを出し合える連携した授業展開の実践が現場で求められている。

1-3. 児童の実態

今年度、筆者は5年生を担当している。語彙や経験が少ないといわれる現代の子ども達にとって、自分のもつ思考をフル回転させてあれこれ想像や推測していく力は、英語学習だけではなく対人関係づくりにおいても欠かせないスキルであると考え、学年経営目標を「Imagination」と掲げている。

外国語科における児童の実態としては、聞き取りのテストで長い問題文が出題されたときや、各単元末にある外国の方が母国を紹介するビデオを視聴しているときに、聞こえた英語を端から訳そうとしていて、少しでもわからない単語があるとあきらめてしまう児童の様子を度々見かけた。小学校外国語科では「やってみよう！」の種をまくこと、コミュニケーションの素地や基礎を耕し「やってみよう！」の芽を豊かにした児童を中学校へ送り出すことが重要であると感じている。英語の初めての言葉（単語）を聞いたときに、絵や文字等のあらゆる手がかりを頼りに、自分から理解しようとする態度を身に付けさせたい。教科として外国語を学ぶ最初の学年である5年生に、どのようにすれば英語が英語のまま理解できたという自信や、英語でやり取りできたという喜びを与えることができるのだろうか。

2. 研究課題

以上の児童の実態を踏まえ、絵本という身近な教材を用い、ALTとの連携による児童の推測力育成を目指した実践研究を行うこととした。本研究では、①学級担任が英語絵本の読み聞かせをする際に、ALTとどのように役割分担をした支援をするといいのか、②教師たちの支援によって、児童の推測力がどのように変容するのか、の2点を研究課題として設定した。

本研究では、推測力を「初めて出会った単語や文、表現、物語全体に対して、周囲の情報を手がかりに自分なりの理由をもって意味を解釈する力」とする。ただ絵本を読むだけでは「教材の力」という視点になる恐れがある。そのため、教師たちの支援によって、児童の推測力を最大限に活かせるか、また、児童がどう変容するのか、について児童側・教師側の両面から考えていきたい。

3. 研究方法

対象者は山梨県内の公立小学校5年生37名で、実践期間は令和7年11月から令和7年12月である。絵本読み聞かせの授業の際に使用したワークシートには「どんなお話でしたか」と自由記述ができる欄を載せ、質的に分析するために児童の記述をコード化して分類した。さらにキーワード抽出として、絵本の内容に関連する語が出ているかを確認し、本文にない語彙が出てきた場合は、児童の推測力や想像力の表れとして注目した。そのような特異的な回答をした児童に対してインタビューを行い、誤答や

独自の語彙使用に着目することで、児童の思考プロセスを深掘りした。

また、ワークシートに複数回答可能な選択式のアンケート項目（図1参照）を載せ、選択肢ごとの回答数を集計し、児童の反応傾向を量的に分析した。

(B) 英語の絵本を聞くときに、何をヒントに物語がわかりましたか。

() 先生の発音

() 先生とのやりとり

() 本に絵があること

() 英語の文字

() 読む人が絵を指さすこと、

() 読む人のジェスチャー（動き）

() 読む人の声色や読むスピード

() お話を聞く場所

() その他・・・()

図1 アンケート項目（複数回答可）

4. 実践と結果

4-1. 読み聞かせの方法

佐藤・佐藤（2010）は「小学生に対する英語絵本の読み聞かせと読解ストラテジーの検証」の中で、小学生にもすでに推測する力が備わっていると述べている。さらに、児童の個人差によって生じる内容理解の差を考慮しつつ、推測力に働きかける読み聞かせを意図的に行う重要性を述べている。推測力を意図的に育む読み聞かせのポイントとして、（1）絵に注意を払うだけでなく、少しでも既知語を聞きとるように児童を仕向けること、（2）前の場面と内容を比較しながら推測させ、様々な手掛かりを組み合わせること、（3）聞きなれた名詞は理解の大きな手がかりになるため、単語への馴染み度を増やすこと、（4）抑揚や声の大きさもヒントになるため感情を込め、動詞を理解させるためにジェスチャーを用いて読むこと、を挙げている。本研究では、これらのポイントを基に活動の流れを作成した（図2参照）。

活動	具体的な内容
Pre-storytelling Activity (2分) T: 動物の名前を確認 (名詞)	C: 前に集まって座る。 H: 児童に動物の写真を見せる。(林間学校で学んだ山に住む動物) 野ネズミ・クマ・カタツムリ・リス・ウッドチャック 「この動物知ってる？」 児童とALTに質問をする。 A: 動物の名前を英語で伝える。 field mice, bears, snails, shells, squirrels, ground hogs
Storytelling Activity (5分)	H: 名詞を指さし、動詞をジェスチャー（動き）で示しながら読み聞かせをする。 名詞 field mice, bears, snails, shells, squirrels, ground hogs 動詞 falling, sleeping, sniff, run, stop, laugh, dance 読むスピードを変えながら読み進める。
Post-storytelling Activity (8分) C: ワークシート 自由記述 T: 動詞を確認	C: 机の位置を戻す : ワークシートに取り組む。 (1) 話の順番に絵をならべて、その絵について内容を書きましょう。 (2) どんなお話でしたか。 (3) 英語の絵本を聞くときに、何をヒントに物語がわかりましたか。 T: 本に出てきた動詞を確認する。 A: ジェスチャーを付けながら発音をする。 falling, sleeping, sniff, run, stop, laugh, dance

図2 英語絵本読み聞かせ①: THE HAPPY DAY を使用した授業の流れ

4-2. 英語絵本読み聞かせ①：学級担任が読み聞かせ、ALT が事前指導

1 1月に実施した英語絵本を活用した一回目の授業では、学級担任が読み聞かせ、ALT が事前指導をする形で連携をした。使用した絵本は *THE HAPPY DAY* (Krauss, 1949) である。昨年度の研究で使用した絵本の中から、児童からの反応を誘発するタイプではなく、ストーリーとしてまとまった内容を理解するために推測力を働かせることを意図し、この絵本を選定した。

図3は一回目の授業ワークシートの自由記述の中から、本文に出てこない言葉を集計したものである。

○本文に出てこない言葉（想像した文）を集計	23回答 / 37回答
いろいろな動物は雪が降って木の中とか穴とかに入っていて、ねておきたらみんなはいっせいにダンスした。	
動物たちが冬眠をしていて、起きて一緒におどって花を見つけるおはなし。 A	
動物たちが仲良くして、みんなでおどって花がさいたのをよろこんでいる話。	
動物たちが冬眠からいっせいに走って集まって、みんなでおどってハッピーな日になる話、	
みんな目覚めて走って一か所に花が咲く。冬に花がさく動物たちの様子のおはなし。	
いろいろな動物が休みをとったりかけっこをしたり楽しくダンスをしていた。動物たちが冬眠から起きていっせいに走りダンスをしていたら、雪が降っているのに花がさいたからみんなでよろこぶ話。	
冬眠していた動物が起きてきて、みんなでダンスして花を咲かす話。 B	
最初はみんな寝ていたけど起きた。いいにおいのするお花のところに言った。みんなでいっせいに。 C	
くまの話。すべて英語で黒と白の色しか使われていない。冬眠から覚めた動物たちがひたすら走っておどって花をさかせる話。	
冬眠から目覚めて走る話。花のにおいにつられる。	
みんな冬眠。みんなくくん。みんな走って黄色い花を見つけると「ストップ」そして「シー（しずかに）」 D	
くま、りす、かたむりなどがいっせいに走って花が咲く話。	
動物たちが冬眠から覚めて、みんなで春をさがしに行くお話。 E	
一度全動物が冬眠をして、そこから動物たちが起きて走り出して、みんなで一つの花を見ていた。	
とうみんから覚めて外に出て、みんなが仲良くしている話。	
冬をそれぞれすごした動物が集まってきた。久しぶりに会ってこんにちは。嬉しい気持ちもあるし花も咲いたし、今日はハッピーな1日だ。 F	
×ねむっていた動物たちが穴からでてきてはったりダンスをしたりして楽しむ話。	
×①みんないっせいに起きてかけっこして、最後に一人がくまにおそれそうになってたけど、一人がストップといった。ハッピーで運がよかった話。	
×②冬のことについてのおはなし。クマが冬眠したり、動物たちが花を見つける。	
×③冬の動物たちの話。	
×④春がきて喜んでいるおはなし。	

図3 英語絵本読み聞かせ①における本文に出てこない言葉の集計

4-3. 読み聞かせ①の後の児童へのインタビュー

本文に出てこない言葉を自由記述欄に書いた児童へインタビューを行い、その中から想像力や推測力を働かせていると思われる回答を抽出した（図3参照）。

A: 動物たちが冬眠をしていて、起きて一緒におどって花を見つけるおはなし

長い時間おどっていた。ふと気がついたら足元に黄色い花が咲いていた。もっとうれしくなってハッピーになった。

B: 冬眠していた動物が起きてきて、みんなでダンスして花を咲かす話

春がきてほしいというダンス。それで、まずはひとつの花が咲いた。これからもっといろいろな花がさく。雪で白い山が花のいろにどんどん広がっていくと思う。

C: 最初はみんな寝ていたけど起きた。いいにおいのするお花のところに言った。みんなでいっせいに。

いいにおいがするのは、花が咲いていたから。動物は鼻がきくから、においに敏感だと思う。雪はにおいがいいから動物は花のにおいがめずらしいと思った sniff を頼りに考えた。

D: みんな冬眠。みんなくくん。みんな走って黄色い花を見つけると「ストップ」そして「シー（しずかに）」

「ストップ」って言ってたから。それまでみんながにぎやかに踊っていたんだけど、花を見つけて「みんな見てみて！」的な感じで、ストップと声をかけあったのかな。花も輝いて、しーんとした瞬間ができたと思う。 sniff, stop, dance を手掛かりにした。

E: 動物たちが冬眠から覚めて、みんなで春をさがしに行くお話

毎年、冬眠から覚めると春になっているから。春の楽しみをみつけに行ったら、それはいいにおいの花だった。 sniff, flower と聞いたから。

F: 冬をそれぞれすごした動物が集まってきた。久しぶりに会ってこんにちは。嬉しい気持ちもあるし花も咲いたし、今日はハッピーな1日だ。

みんなに会いたかった。いっせいにみんな起きてきたから会えて嬉しい。しかも雪の中に花を見つけてきれいでなんていい日だ。 Happy という題名だから。

4.4. 英語絵本読み聞かせ②：学級担任と ALT が登場人物の役割分担をして読み聞かせ

一回目の授業アンケートの結果から、ALT とのやりとりに課題があることあったことが分かった（図6参照）。そこで、12月に実施した英語絵本を活用した二回目の授業では、学級担任と ALT が登場人物の役割分担をして読み聞かせる形で授業を構成した（図4参照）。使用した絵本は *SAME, SAME, but DIFFERENT* (Kostecki-Shaw, 2011) である。この絵本を選定した理由は、絵本に出てくる主役二人の生活における相違点や共通点について教師二人で分担しながら読み聞かせを行うことができるためである。

児童の活動	教師の支援
Pre - storytelling Activity (5分) ・教師の質問に答える。	絵本『 <i>SAME, SAME but DIFFERENT</i> 』 ・本の表紙を見せて、物語を予想させるような質問をする。 ・ Where are they? ・ What do you think this story is about? ・ What do you think will happen?
Storytelling Activity (20分) ・物語を聞く。 ・教師の質問に答える。	・教師2人で登場人物を分担して読み聞かせを行う。 ・名詞を指さし、動詞をジェスチャーで示しながら読み聞かせをする。 ・1ページずつ児童とやりとりをする。 （これまでに児童が親しんできた既習表現で質問をする。） ・児童の反応を見ながら読むスピードを調整して読み進める。
Post - storytelling Activity (8分) ・机の位置を戻す ・ワークシートに取り組む。 どんなお話でしたか（自由記述） 英語の絵本を聞くときに、何をヒントに物語がわかりましたか（複数選択可）	・ワークシートの書き方を説明する。 ・机間巡視し、児童からの質問に答える。 「どんなお話でしたか」→ 文脈理解の広がり进行评估 「何をヒントに物語がわかりましたか」→ 手がかりの活用を評価
Activity (10分) ・グループの形をつくる。 ・ALTの説明（物語の内容）に合った絵カードを選ぶ。	・絵本のページを印刷した絵カードを配る。 ・ルール説明をする。 ・絵カードの内容を確認しながら進行する。

図4 英語絵本読み聞かせ②：SAME, SAME, but DIFFERENT を使用した授業の流れ

4.5. 読み聞かせ②の後の児童へのインタビュー

二回目の授業も一回目と同様に、本文に出てこない言葉を自由記述欄に書いた児童へインタビューを行い、その中から想像力や推測力を働かせていると思われる回答を抽出した（図5参照）。

A: みんないろいろ個性があってみんなちがってみんないいという感じのお話

何がいいとか悪いとかじゃなくて、「うちらはこうだよ」と友達に伝えている。友達だからちがう部分も知ることでお互いに通じ合いたいんだと思う。表紙のタイトルがヒントになった。

B: どちらの町もいいところがあるけど、町の姿や文化のちがいがあがる。地球の真逆にいる2人だけ、世界の反対側にも同じように暮らしている人もいるんだなあと思ってぼくもすごしていききたい。

太陽と月が描いてあったから、地球の真逆だとわかる。いまこうやっている時も、ぼくとはちがう暮らしをしている人があるのかなとか考えた。本の絵がよくわかった。

C: それぞれの国を言いながら、「友達だよ、ずっと」というようなことを表している話

アメリカとインドで遠くはなれているし、お互いの生活でちがうところがあるのを知って、会いたいと思っている。いつか（大人になったら）会えるだろう。Best friendは親友のことだから。

D: 暮らし方や環境はちがうんだけど、2人はいつまでも親友だという話

環境なんか関係ない。手紙のやりとりが続いているからこの先もずっと友達だと思う。SAMEは心が同じということ。表紙のタイトルをもとに考えた。

○本文に出てこない言葉（想像した文）を集計

14回答 / 37回答

みんないろいろ個性があってみんなちがってみんないいという感じのお話。 A
遠くはなれた国でも同じところもあればちがうところもある。でも相手を理解しようとする。
地球にはいろいろな場所があったり国もある。住んでいる場所や環境にはちがいがあがるという話。
真反対にある国があって、住んでいる地域のことなど紹介しあう話。
同じ地球にいるのに、まったくちがう環境ややり方があるという話。
どちらの町もいいところがあるけど、町の姿や文化のちがいがあがる。地球の真逆にいる2人だけ、世界の反対側にも同じように暮らしている人もいるんだなあと思ってぼくもすごしていききたいと思った。 B
地球は1つで同じだけど、同じ世界の中にも暮らし方や生活がちがうことがある。
同じことをしているんだけど、やりがちがう。同じとちがうということ。
ちがう国に住んでいると、やっていることは同じなんだけど方法やものがちがうというお話。
2人が仲良くなった。
それぞれの国を言いながら、「友達だよ、ずっと」というようなことを表している話。 C
それぞれの国で文化がちがうんだけど、友達になりたいと思って手紙を書いている。
みんなちがってみんないい。暮らし方や環境はちがうんだけど、2人はいつまでも親友だという話。 D
2人とも同じことをやっても、環境がちがう。でも2人とも大事な友達。
×反対の場所に住む2人が自分の国を紹介して、実際に会って通じ合うお話。・・・背中を合わせて本を読んでいる絵があったから会えたと思った。
×インドとアメリカにいる男の子の話。どんどん距離が近づいて最後に友達になる。・・・だんだん手紙の内容が深くなっているから。色々なことを知っていくうちに、心の距離が近くなっていくという意味。それが友達になるということ。
×ちがう国にいる友達とあって、あいさつをして、家に帰って布団でねる話。 ・・・手をつないであいさつを一緒にしていたから。夢をみているところがあったから1日のながれだと思った。

図5 英語読み聞かせ②における本文に出てこない言葉の集計

4-6. アンケート結果と考察

11月のアンケートでは、物語理解の手がかりとして「ALTとのやりとり」と答えた児童は6人と少なく、ALTとのやりとりが十分に機能していない課題が見られた。しかし、12月の授業ではその数が15人へと大きく増加した（図6参照）。これは、ALTが児童との関わり方を工夫したことや、読み聞かせ中のジェスチャー・指さし・声の変化など、児童が参加しやすい働きかけが強化された結果、ALTとのやりとりが物語理解に結びつきやすくなったと考えられる。また、12月の授業では新たに「先生2人の読み聞かせ」という項目を追加し、37名中26名が「理解の助けになった」と回答している。これは、担任とALTが役割を分担しながら読み聞かせを行うことで、児童が視覚・聴覚の両面から情報を受け取りやすくなり、物語の展開や語彙の意味をよりつかみやすくなったことを示している。特に、2人の教師が交互に読み進めたり、動作や表情を補い合ったりすることで、児童の注意が持続し、理解の手がかりが増えたと考えられる。

(B) 英語の絵本を聞くとときに、何をヒントに物語がわかりましたか。(複数回答可)	11月実施 37人	12月実施 37人
ALTの発音	14	10
ALTとのやりとり	6	15
本に絵があること	35	33
英語の文字	14	13
読む人が絵を指さすこと	19	24
読む人のジェスチャー	23	23
読む人の声色や読むスピード	12	10
お話を聞く場所	1	2
その他	1	0
先生2人の読み聞かせ	／	26

図6 アンケート結果(複数回答可)

5. 考察

今までの研究結果をふまえ、ALTとの連携や推測力に関する考察を、以下の4点にまとめた。

(1) 担任とALTの役割の相補性

アンケート結果から「絵」「ジェスチャー」「指さし」が理解の主要な手がかりとなることがわかった。これは担任が児童理解に基づいて提供できる支援である。一方、「ALTの発音」「ALTとのやりとり」は、正確な音声入力やリアルな反応を児童に与える役割となることがわかった。ALTの存在は推測の確証や再構成を助けるといえる。したがって、担任は児童の安心感と推測支援、ALTは音声的リアリティと補足的フィードバックという役割分担が、児童の推測力を最大化するのではないかと考えられる。

(2) 推測力と語彙修得の相互作用

児童は本文にない語を付け加えながら物語を再構成しており、推測力を積極的に働かせていることが確認できた。言葉を自発的に抽出して物語を再構成していることから、語彙習得と推測力が相互に作用していることが分かる。これは、語彙習得が推測力を支え、推測力が語彙の定着を促すという双方向の関係を示している。読み聞かせは単なる語彙導入ではなく、語彙を推測の文脈で使わせる場として機能している。また、インタビューでは「冬眠」「いっせいに」「かけっこ」などの語が頻出したことから、児童は既知語を手がかりに場面の展開や登場人物の行動を推測していたと思われる。したがって、語彙の馴染み度が推測の精度を高めることが示唆された。

(3) ジェスチャー・指さし・声色(教師の非言語的支援)

「読む人のジェスチャー」、「絵を指さすこと」、「声色や読むスピード」に複数回答が見られた。動詞理解において、ジェスチャーが意味の手がかりとなった。また、「ストップって言ってたから、みんなが花を見つけて静かになったと思う」など、音声と動きの組み合わせから場面を推測していたことから、教師の身体表現が、言語理解を超えて場面の意味を推測させているといえる。

(4) 物語の構造(時間の流れ・展開)

「長い時間踊っていた」「ふと気づいたら花が咲いていた」などの回答から、時間の経過や因果関係を自分なりに構成していることがわかった。また、「春が来てほしいというダンス」「花が咲いたからハッピーになった」など、物語の展開を再構成していた。児童は絵と音声をもとに、時間軸や因果関係を推

測していることが示された。

6. まとめと今後への展望

本文にない単語を付け足しながら「この場面はこうだった」と、ワークシートを書き進めている児童の意欲的な姿が見られた。教師たちの支援によって、初めて出会った単語や文、表現、物語全体に対して、周囲の情報を手がかりに自分なりの理由をもって意味を解釈する力が発揮されていた。一方、外国語の成績が良い児童（塾などに通っている児童）は、和訳をして正解（完璧な解答）をもとめる傾向があり、「これ、なんて読みますか？」と文字を頼りにしている様子が見られた。児童の個人差によって生じる内容理解の差を考慮しながら今後も実践を重ね、児童の推測力向上を目指していきたい。

絵本の確保について、学校の図書室に置いてある外国語関連の本は、物語より調べ学習で使用するタイプの本が圧倒的に多い。物語の本は有名な絵本をそのまま翻訳したものであるため、英文の内容も難しく、児童自ら読むことは困難である。借りる児童はほとんどいないとのことだ。教科書改訂に伴い、司書教諭との情報共有も重要である。学級担任が気軽に英語の絵本を手にとれるような環境整備、授業の中で読み聞かせを取り入れ、児童とともに担任も英語を楽しめる授業づくりの提案を考えていきたい。

○. 参考・引用文献

- ・ 金山幸平. (2021). 絵本の読み聞かせが小学校英語の目標達成に与える影響. *北海道教育大学紀要*, 71(2), 7-25.
- ・ 佐藤久美子・佐藤綾乃. (2010). L2 小学生の英語絵本の理解過程と読解ストラテジー. *小学校英語教育学会紀要*, 10, 43-48.
- ・ 杉本光穂・湯川笑子・森明宏. (2010). 英語専科教員および担任による絵本読み聞かせ. *小学校英語教育学会紀要*, 10, 41-52.
- ・ 寺沢拓敬. (2020). *小学校英語のジレンマ*. 岩波新書.
- ・ 長田恵理. (2018). 小学校外国語教育における絵本の活用: 指導者が選ぶ英語絵本. *國學院大學人間開発学研究*, 9, 39-56.
- ・ 松浦友里・伊東英. (2012). 小学校外国語活動における英語絵本に関する実践研究. *岐阜大学カリキュラム開発研究*, 29(1), 94-101.
- ・ 文部科学省. (2016). *Hi, friends! Story Books* 文部科学省.
- ・ 文部科学省. (2017). *小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 外国語活動・外国語編*.
- ・ 文部科学省. (2017). *小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック*.
- ・ 文部科学省. (2023). *令和5年度 英語教育実施状況調査*.